

# 今を生きた記憶

— 託された未来を考える —

英霊に感謝と慰霊の真心を捧げる — ペリリュウ・硫黄島・沖縄・学徒出陣 —





# はじめに

大東亜戦争終結から七十年という時間が経つにつれ、戦前や戦中の様子を直接知る人が少なくなってきました。

毎年、八月十五日の終戦記念日には戦死者を追悼し平和を祈念するため、全国で黙祷が捧げられていますが、その他にも年間を通じて、祈りを捧げるべき多くの日があります。異国の地で我が国と現地の人々を守るために戦ったペリリューの戦いの終結とされる日、我が国の領土が戦場となった硫黄島の戦いの終結とされる日、民間人が戦火に巻き込まれた沖縄戦の終結とされる日、学問の道半ばにして書物を捨て、戦いに身を投じた学徒出陣壮行の日等…。

その時代に生きた人々が何を目にし、何を感じていたのか。そこにある大切な心をかみしめ、その志を受け継ぐことで我が国の未来のために確かな一歩を踏み出せるはずです。

この度、終戦七十年に際し、多くの祈りの日がある中で、いくつかの戦いの記憶を辿り、英霊に対する感謝と慰霊の心をもって、我が国の国柄を未来へ守り伝えてゆくことを考えるきっかけになれば幸いです。

# ペリリューの戦い

—異国の地と我が国を守るために—

情勢次第に悪化しパラオ島防護の為

昭和十九年七月七日名譽の召集令状を受く

男子の本懐之に過ぐるものなし、又家門の誉なり

勇躍入隊 大君の醜の御楯として米英軍を撃滅せん

戦死の報ありても決して取乱さざる事

魂は靖國の神として永久に皇國を守る

会ひ度くば靖國神社へ来れ

お前の身のことについては父とよく相談せよ

軍人の妻としての体面を保て

父母に孝養を頼む

身体に気をつけて朗かにくらし

ながらくのお世話ありがたう 深謝す

昭和十九年七月八日

大詔奉戴日

貞子 殿

貞夫

『英霊の言乃葉 五』靖國神社刊より

これは南の地、パラオ防衛のために召集を受けた仲西貞夫陸軍軍曹（南洋庁訓導）が、妻に宛てて書いた手紙です。「情勢次第に悪化し」と仲西軍曹が書いたように、大東亜戦争開戦以降、破竹の勢いで勝利していた我が国も、米英をはじめとする欧米諸国の圧倒的物力に押され、戦況は徐々に悪化していきました。東洋最大

とも言われた二本の滑走路が敷かれたパラオ諸島のペリリュー島は、日本軍にとつてはグアムやサイパンの後方支援基地として、日本の防衛上とても重要な拠点でした。一方、フィリピン奪還に総力をあげる米軍にとつても、フィリピンのすぐ東に位置するパラオの日本軍基地の攻略が必要でした。パラオでの戦いはきつと激しいものになる、けれど、国を守るため、故郷に残る大切な人を守るため、たとえ死しても戦うのだという強い決意と覚悟が、仲西軍曹の手紙から感じ取れます。

日本軍は、ペリリュー島を徹底して要塞化、地下陣地化して兵の保全に努め、洞窟などを拠点に二ヶ月以上にわたる組織的持久戦に持ち込みました。昭和十九年十一月二十五日、組織的戦闘は終結し、米軍の約四十%の戦闘損害比率を記録した激しい戦いであったと語られています。その結果、その後の硫黄島戦、沖繩戦とともに、アメリカに「日本と戦うと被害は甚大になる」という認識を植え付けることになりました。

パラオは第一次世界大戦後、国際連盟の委任に基づき、我が国が統治を行いました。多くの日本人が移住して開発を行い、現地の人々に教育や予防接種の機会を設けるなど、パラオの生活・文化水準の向上に尽力しました。また、ペリリューの戦いでは戦争に巻き込まないため、民間人である現地の人々を他島に疎開させています。日本の守備隊は我が国だけでなく、パラオの人々も守ったのです。パラオには、独立した今でも「ペン トウ」や「デンワ」といった日本語の言葉が多数残っており、子供に日本名を付ける人がいるなど、親日国として有名です。

異国の地とともに、「永久に皇國を守る」。その思いは、我が国とパラオの良好な関係を今も見守り続けて下さっています。



写真提供：共同通信社

日本委任統治時のパラオ島コロ二街 日本語の看板が見える



# 硫黄島の戦い

— 戦地より愛児へ。命をつなぐために —

はいけい、あけみ、けいこさん、おしよがつはすぐですね。

おてがみたしかにうけとりました。

そのご、みんなおげんきでなによりとよろこんでをります。

おとうさんも、まいちにげんきて、みくのためにはたらいてをります。

かきもたくさんなつたさうですね。そしてあかくうれたかきを

おとうさんにそなへたさうですね。ひじやうにおいしかつたですよ。

けいこさん、けいこさんもことは、えうちゑんで、らいねんの四月

はこくみんがくかうの一年生ですね。うれいせう。

あけみ、けいこさん!! おだいさん、おばあさん、おかあちゃんによ

ろしく。

またおたよりまつてをります。 さようなら

昭和十九年十二月十七日

角 光男

角 あけみ  
けいこ 様

『英霊の言乃葉二』靖國神社刊より

戦地からお子さん宛にやさしい言葉で手紙を書いた角光男陸軍兵長。彼が着任していたのは、日本列島の遙か南、東京とサイパン島のほぼ中間に位置する硫黄島でした。

硫黄ガスが充満し、夏には気温五十度を超すような小さな島で、補給もままならず、溜めた雨水や硫黄混じりの地下水で渴きを癒すような厳しい状況の中、圧

倒的な物力を持って迫りくるアメリカとの決戦に向けて準備をしていた硫黄島の守備兵たちにとって、家族との手紙のやり取りは何よりも心の支えとなったでしょう。

大東亜戦争末期、南洋諸島が次々と陥落する中、飛行場と敵機を監視する防空監視所の拠点があった硫黄島は、我が国にとって防衛の要であると同時に、米軍にとっても、

本土攻撃の拠点としてぜひとも押さえたい場所でした。硫黄島が奪われれば、その飛行場から本土への空襲が可能になります。

自分の命を懸けてでも、硫黄島を守り、故郷で暮らす父や母、愛する妻や子供たちを守りたい。硫黄島の陥落が一日延びれば、一日爆撃が遅れ、爆撃が一日遅ければ、その一日分、大切な人たちの命を守ることができる。

— そのための礎となる。 —

その決意と覚悟で、硫黄島守備隊は決死の戦いに臨みました。

結果、硫黄島の戦いは、一ヶ月以上も続き、昭和二十年三月二十六日に組織的戦闘は終結し、日本軍は約二一、九〇〇人、米軍は約二八、〇〇〇人に及ぶ死傷者を出すなど、大東亜戦争屈指の激戦と言われました。しかし戦後、硫黄島におけるほぼ全ての戦死者の遺骨を収容したアメリカに対し、我が国では、自国領土内にもかかわらず、およそ五割の同胞の御遺骨が島に残されたままになっています。政府はこの状況を憂慮し、遺骨収容を「国の責務」として強化する方針を示しています。

「またおたよりまつてをります」。便りを支えに愛児を守る。その思いは、残された家族、ひいては我が国の未来に注がれています。



硫黄島にひしめく米海兵隊

# 沖繩の戦い

— 学徒隊の決意と母親への想い —

お母様！

いよいよ私達女性も、学徒看護隊として出勤出来ますことを、心から喜んで居ります。お母様も喜んで下さい。——お母様は女の子を手離して、御心配なさる事でございませうけど、決して御心配はなさいませぬ。——散る時には、立派な桜花となつて散つて行きます。その時は、家の子は、「偉かった」とほめて下さいね。——

お母様！空襲時はよく御用心下さいね。そして善ちやんと弘ちやんを良く守つて下さいませ。決して私の御心配はなさいませぬ様にして下さい。

ネルはお母様のものか、善ちやんのものを作つて着せて下さい。波の上宮のお守りを入れて置きますから、善ちやんの出勤の際には、お母様の髪の毛と共に、弘ちやんにお守り袋を作つて貰つて、善ちやんにやつて下さい。

なるべく自分でやる心算でしたけど、到底忙しくて出来ませんから、弘ちやんに作つてもらひます。

お母様！今まで口ごたへばかりして来てすみませんでした。

これからは、きつと立派な一人前の看護婦になつて、お國の為に働きます。お母様！御身体を無理なさらぬ様に、又善ちやん弘ちやんを怒らずに、朗らかに暮して下さい。

大島兵曹、信一兄さんよろしくおつしやつて下さいませ。

最後に一家の御健康をお祈りいたします。

『英霊の言乃葉』靖國神社刊より

美 枝 かしこ

この手紙は県立第二高等女学校四年生であった大嶺美枝さんが白梅学徒隊の従軍看護婦として出陣する前夜にしたためたものです。この手紙からはお國のために御奉公出来る嬉しさと強い決意が感じられます。

沖繩戦では陸海軍が総力を挙げて戦い、凄惨な地上戦となりました。地元中等学校からは十代半ばの生徒が学徒隊として出陣しました。女子学徒は主に野戦病院等で看護活動に当たり、男子学徒は通信隊や鉄血勤皇隊として物資調達や各部隊への連絡業務、時として前線に立ち、斬り込みなどを行いました。学生であった彼女らも我が國の将兵と同様に強い決意をもつて戦地に赴いたのです。

衛生環境も悪く、酷い有様であった野戦病院で、悶え苦しむ負傷兵一人ひとりに真摯に向き合い、看護にあたりました。また、砲弾の合間をぬって、洗濯や物資の輸送なども行いました。彼女たちのその健気な様子は、本当に「白衣の天使」であったと、当時を知る人は言います。

今日、沖繩戦最後の激戦地となった沖繩本島南部には、この地で亡くなった方々を偲び、大嶺さんが祀られている白梅之塔はもとより、ひめゆりの塔、各都道府県の塔など多くの慰霊塔が建てられています。我が國の将兵が全国から沖繩に集結し、総力戦で臨んでいたことがわかります。

昭和二十年六月二十三日、組織的戦闘は終結したと言われています。

「偉かったと誉めて下さい」という言葉からは、死への覚悟と、自分が万が一亡くなった時にも悲しむことなく誇りに思つてほしいという、残される家族に対する細やかな気遣いが窺えます。本土上陸を阻止して、家族をこの國を守る。その思い、その覚悟を、私たちは感じずにはおれません。



沖繩の港に上陸する米軍

# 学徒出陣

—若き学徒兵の葛藤と悟り—

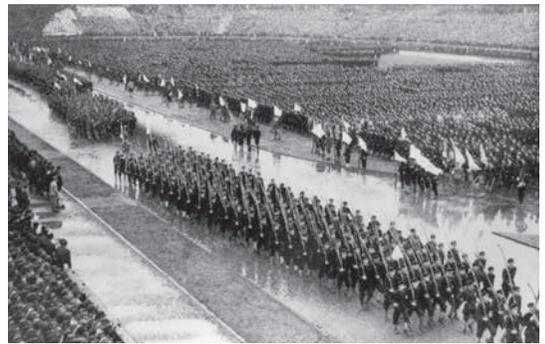
：燃ゆる殉忠の血潮、熱血、撃滅の闘志、必中の確信、大和男の子としての誰にも劣らざる気魄はある。誰よりもある。しかし人間としての弱さか、生の不可思議、死の不可思議、それは未解のままの様な気がする。しかしそれは悩みとかいふ様な意味ではない。軍人としてこの機を頂きよろこびに耐へざるも、何だか、今俺は死して良いのかも思ふ。否今死んで良い。開戦時に引返す戦機を作るのだ。今こそ征かざれば征く時なし。…

『靖國のこえに耳を澄ませて 戦歿学徒十七人の肖像』明成社刊より

学徒兵で特攻隊員であった西田高光中尉は、若き血潮に燃え、祖国のために戦う喜びを感じながらも、死に直面する中、自らの生と死に対する葛藤に揺れる思いを日記に綴っています。しかし、決してそれを表には出しません。海軍報道班員であった作家・山岡荘八氏の「この戦を果して勝抜けると思っているのかどつか？もし負けても、悔いはないのか？今日の心境になるまでどのような心理の波があったのか？」等、当時禁句となっていた質問に対して、西田中尉は重い口調で、現在ここにいる学徒兵は、皆進んで志願した者であること、もはや動揺期は克服していることを述べ、そして最後に

学鷲(学徒兵の航空機搭乗員)は一応インテリです。そう簡単に勝てるなどとは思っていません。しかし負けたとしても、そのあとはどうなるのです……おわかりでしょう。われわれの生命は講和の条件にも、その後の日本人の運命にもつながっていますよ。そう、民族の誇りに……

(同)



昭和18年10月21日

朝日新聞社/amanaimages

神宮外苑競技場で行われた出陣学徒の壮行会

と答えたといいました。戦況の悪化に伴い不足する兵力を補充するため、兵役の猶予措置が停止となり、学問追究の道半ばで召集され、わずかな訓練期間を経て、戦地に出撃していった多くの学徒兵たち。

アメリカは、我が国を徹底的に撃滅するべきであるという考えのもと、硫黄島、沖縄と日本本土に侵攻してきました。しかし日本兵や国民の士気が予想以上に高く、米軍の被害も甚大となり、今後の侵攻においても多くの犠牲を出すことになるかもしれないという危機感を持ったため、対日宥和派の意見も取り入れられるようになり、ポツダム宣言へとつながったという見解もあります。

学徒兵も死ぬことが決して恐くないわけはありません。しかし、自分たちが命がけで戦うことで、その死が戦局だけでなく、後の日本のありようにも影響を与えるだろうと考え、強い覚悟を持って戦地に赴いたのです。たとえ我が国が負けたとしても、その後の日本民族がどう生きていくのか、というところにまでその視線は注がれています。

彼らの覚悟の死は、今日を生きる私たちの命、ひいては我が国の将来をも救ったのです。

自らの死が後世の歴史に及ぼす深い意味を、若き学徒兵たちは悟っていたのかもしれない。

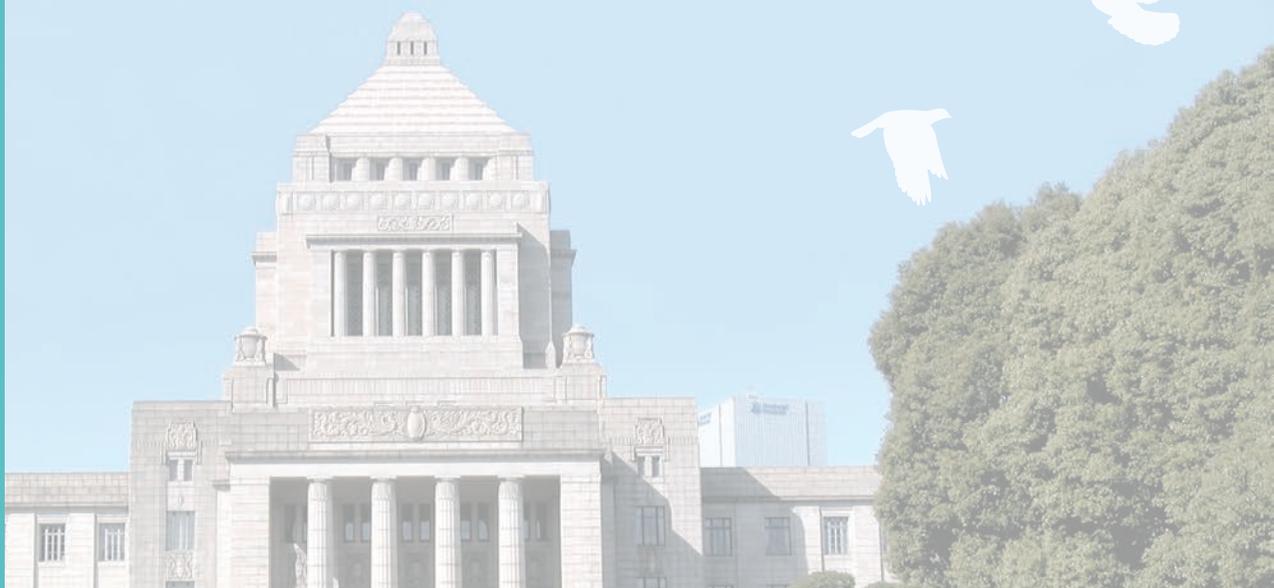
# 未来に向けて

先の大戦において、先人たちが決死の思いで守ろうとした国に、今私たちは生きています。

しかし戦後、我が国では戦争だけでなく、国家や国防意識にまで忌避感が漂い、他国に対する警戒態勢や危機感が十分でなかったと言えます。北方領土、竹島、尖閣諸島など、先人の覚悟の上に守られてきた我が国固有の領土を脅かす諸問題が発生し、今も未解決のままです。また、国民もその安全を脅かされています。北朝鮮による日本人の拉致事件が発覚したとき、拉致被害者家族である横田早紀江さんは「日本は一体、国家なのか。国民を救うのが国の役割のはずなのに何故、救えないのか」と訴えたといっています。

他国に国の守りを委ね、主体性を失ってきた戦後の風潮は、個人の利益を優先するあまり、公共心や他を思いやる心、自らを戒める心など、道徳心を欠いたと思われる様々な事象をも生み出したのかもしれない。そこには、国はなるべく個人に干渉することなく、個人の自由意思に基づいて個人は自分のために生きているという考えを支え、行き過ぎた権利の主張までも認めかねない憲法があることも否めません。安倍総理は、断固として国民の生命と財産、領土を守るという決意のもと、そのための基盤を整えてゆくことを明言しています。「国のかたち」を表す憲法の改正は不可欠です。

戦後七十年を迎え、私たちは当時を振り返り、この国の未来を託してかけがえのない命を擲った英霊の大切な思いをしっかりと受けとめ、日本らしい国づくりに向けて主体性をもって一步を踏み出す責務があるのです。



## ペリリユー島

今も日米両軍の戦車や日本軍司令部跡などが残る。



## 硫黄島

今も多くの遺骨や戦跡が残されているが、一般の立入りは制限されている。



## 沖繩

沖縄戦の激戦地であった摩文仁の丘には平和祈念公園が整備され、各都道府県の塔が並ぶ。



amanaimages



## 「出陣学徒 壮行の地」の碑

現在は建替えるため、かつて壮行会が行われた神宮外苑競技場（現・国立競技場）前から秩父宮ラグビー場前に移転されている。



## 神社本庁

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-1-2  
TEL.03-3379-8011 FAX.03-3379-8299  
<http://jinjahoncho.or.jp>  
発行 平成27年3月26日